```
2005
Ross River virus - New Zealand (Waikato) ex Australia (NT) 20050120.0195
2004
Ross River virus - Australia (QLD) \underline{20040403.0916}
Ross River virus - Australia (QLD) (02): background 20040404.0928
Ross River virus - Australia (WA) (03) 20040105.0049
Ross River virus - Australia (WA) (04) 20040427.1165
Ross River virus - Australia (WA) (02) 20031230.3170
Ross river virus - Australia (WA): alert 20031008.2529
Ross River/Barmah Forest viruses - Australia (NSW) 20030628.1597
2002
Ross river virus - Australia (Tasmania) (03) 20020821.5105
Ross River Virus - Australia (Tasmania) 20020410.3927
2001
Ross River virus - Australia (South) 20010320.0560
Ross River virus - Australia (North. Territory) (03) 20010225.0367
Ross River virus - Australia 20010116.0127
Ross River virus - Australia (Northern Territory) 20010108.0062
Ross River virus - Australia (South Australia): ALERT 20001229.2292
Ross River/Barmah virus - Australia (SW): alert 20000123.0115
Ross River virus - Australia (Tasmania) (02) 19991222.2198
Ross River virus - Australia (West): alert 19991106.1989
Ross River virus - Australia (Tasmania) 19990311.0371
Ross River virus infection - Australia 19981231.2472
Ross River virus - Australia (New South Wales) (02) 19980112.0087
Ross River virus - Australia (New South Wales) 19980109.0067
1997
Ross River virus, military exercises: Australia 19970728.1587
Ross River fever - Australia (03) 19970605.1172
Ross River, Barmah Forest viruses - Australia 19970604.1162
Ross River fever - Australia (02) 19970604.1161
Ross River fever - Australia (Sydney) 19970602.1126]
.....ty/msp/dk
****************
ProMED-mail makes every effort to verify the reports
are posted, but the accuracy and completeness of the
            and of any statements or opinions based
information,
thereon, are not guaranteed. The reader assumes all risks in
using information posted or archived by ProMED-mail. ISID
and its associated service providers shall not be held
responsible for errors or omissions or held liable for any
damages incurred as a result of use or reliance upon posted
or archived material.
***********
        a ProMED-mail
                           Premium
                                       Subscriber
Become
<a href="http://www.isid.org/ProMEDMail Premium.shtml">http://www.isid.org/ProMEDMail Premium.shtml</a>
***********
Visit ProMED-mail's web site at < http://www.promedmail.org>.
Send all items for posting to: promed@promedmail.org
(NOT to an individual moderator). If you do not give your
full name and affiliation, it may not be posted.
commands to subscribe/unsubscribe, get archives,
                                                  help.
etc. to: majordomo@promedmail.org.
                                  For assistance from a
human being send mail to: · owner-promed@promedmail.org.
****************
```

# 13th ICID | site map | ISID home

©2001,2007 International Society for Infectious Diseases
All Rights Reserved.
Read our <u>privacy guldelines</u>.
Use of this web site and related services is governed by the <u>Terms of Service</u>.

別紙様式第 2-1

医薬品 研究報告 調查報告書

			報告日	第一報入手目	新医薬品等の区分	り区分	総合機構処理欄	
職力	職別香亏・報告回剱			2007年12月25日	該当なし	١		
1	般的名称	別紙のとおり	研究報告の	CDC/Travelers' Health, Outbreak Notice.	reak Notice.	公表国		
殿	売名(企業名)	別紙のとおり	公表状况	January 8, 2008.		ウガンダ		
	問題点:2007 4	問題点:2007 年後半にウガンダで発生したエボラ出血熱のアウトブレイクは、	ボラ出血熱のアウ	1	既知の 4 つのエボラウイルス株と異なる新	と異なる新	使用上の注意記載状況	
•	たなウイルス株	たなウイルス株が原因である可能性がある。					その他参考事項等	•
存究報告の概要	米国 CDC と いて報告した。7 37 人が死亡した とが示された。	米国 CDC とウガンダ保健省は、ウガンダ西部に位置する Bundibugyo 地区におけるエボラ出血熱のアウトブレイクについて報告した。アウトブレイクは早ければ 2007 年 8 月から始まった可能性がある。2008 年 1 月 3 日までに 148 人が罹患し、87 人が死亡した。症例サンプルの遺伝子解析により、既知の 4 つのエボラウイルス株と異なる、新たなウイルス株であることが示された。しかし、確定するには更なる解析が必要である。	f部に位置する Bun 7 年 8 月から始まっ により、既知の 4 つ 解析が必要である。	置する Bundibugyo 地区におけるエボラ出血熱のアウトブレイクにつ3から始まった可能性がある。2008 年1月3日までに 148 人が罹患し、既知の4つのエボラウイルス株と異なる、新たなウイルス株であるに要である。	出血熱のアウトブ 3 日までに 148 / 、 新たなウイルス	アイクにつてが罹患し、株であるに	記載なし	
			•					
		報告企業の意見		- 今後	今後の対応			
別条	別紙のとおり			今後とも関連情報の収集に努め、本剤の安全性の確保を 図っていきたい。	努め、本剤の安全	性の確保を	7	
					. •			
					:			
						,		

edDRA10.1

	(①人 本港アルブミン (②人 本港アルブミン (②人 本港アルブミン* (④人 免役 グログ I)ン (同群 極ペプシン の 出土 人 免疫 グロブ I)ン (同数
	ペーニー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
一般的名称	⑩乾燥濃縮人血液凝固第IX因子、⑪乾燥抗破傷風人免疫グロブリン、⑫抗 HBs 人免疫グロブリン、⑬トロンビン、⑭フィブリノゲン加
	第XⅢ因子、⑩乾燥濃縮人アンチトロンビンⅢ、⑩ヒスタミン加人免疫グロブリン製剤、⑪人血清アルブミン*、⑩人血清アルブミン*、
,	⑩乾燥ペプシン処理人免役グロブリン*、⑩乾燥人血液凝固第X因子複合体*、⑩乾燥濃縮人アンチトロンビンⅢ
	①献血アルブミン 20 "化血研"、②献血アルブミン 25 "化血研"、③人血清アルブミン "化血研" *、④ "化血研" ガンマーグロブリン、
	⑤献血静注グロブリン"化血研"、⑥献血ベニロン- I、⑦ベニロン*、⑧注射用アナクトC2,500 単位、⑨コンファクトF、⑩ノバクト
14 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	M、⑪テタノセーラ、⑫ヘパトセーラ、⑬トロンビン"化血研"、⑭ボルヒール、⑮アンスロビンP、⑯ヒスタグロビン、⑪アルブミン
	20%化血研*、個アルブミン5%化血研*、回静注グロブリン*、個ノバクトF*、のアンスロビンP1500 注射用
	エボラ出血熱はエボラウイルスによる急性熱性疾患であり、ラッサ熱、マールブルグ病、クリミア・コンゴ出血熱とともに、ウイルス
	性出血熱の一疾患である。エボラウイルスは、フィロウイルス科(Filoviridae) に属し、1 本鎖 RNA を核酸として持ち、エンベロープ
	を有する。短径が 80~100nm、長径が 700~1,500nm で、多形性(U 字状、ひも状、ぜんまい状等)を示す。
	エボラ出血熱は、現在までアフリカの中央部でのみ発生している。感染者・患者の血液や体液との接触によりとトからとトへ感染が拡
<i>.</i>	大し、多数の死者を出す流行を起こす。ヒトは終末宿主であるが、動物、昆虫などの自然宿主、媒介動物については全く不明である。そ
	のため、自然界からヒトへの感染経路も不明である。
	発症は突発的で進行も早い。潜伏期は2~21日で、汚染注射器を通した感染では早く、接触感染では長い。発熱、頭痛、腹痛、咽頭
	痛、筋肉痛、胸部痛及び出血等の症状がみられ、重篤化する。致死率は患者の53~88%と高い。
報告企業の意見	弊所の血漿分画製剤の製造工程には、冷エタノール分画工程、ウイルス除去膜ろ過工程あるいは加熱工程等の原理の異なるウイルス除
	去及び不活化工程が存在しているので、ウイルスクリアランスが期待される。
	各製造工程のウイルス除去・不活化効果は、「血漿分画製剤のウイルスに対する安全性確保に関するガイドライン(医薬発第 1047 号、
	平成 11 年 8 月 30 日)」に従い、ウシウイルス性下痢ウイルス(BVDV)、仮性狂犬病ウイルス(PRV)、ブタパルボウイルス(PPV)、A
	型肝炎ウイルス(HAV)または脳心筋炎ウイルス(EMCV)をモデルウイルスとして、ウイルスプロセスバリデーションを実施し、評
	価を行っている。今回報告したエボラウイルスは、エンベロープの有無、核酸の種類等からモデルウイルスとしては BVDV が該当する
	と考えられるが、上記バリデーションの結果から、BVDV の除去・不活化効果を有することを確認している。
	また、これまでに当該製剤によるエボラウイルス感染の報告例は無い。
	以上の点から、当該製剤はエボラウイルスに対する安全性を確保していると考える。



Outbreak Notice

Updated: Ebola Outbreak in the District of Bundibugyo, Uganda This information is current as of today, January 24, 2008 at 20:11

Updated: January 08, 2008

The U.S. CDC and the Ministry of Health of Uganda have reported an Ebola hemorrhagic fever outbreak in the Bundibugyo district located in the Western part of the country. The outbreak may have begun as early as August 2007. As of January 3, 2008, 148 people have become ill and 37 people have died. Genetic analysis of samples from case-patients indicated that this is a new virus strain distinct from the four known strains of Ebola virus. However, further studies will be needed before this can be verified.

Ebola hemorrhagic fever is a rare, serious viral disease which develops suddenly, with common symptoms of fever, headache, joint and muscle aches, sore throat, and weakness. Diarrhea, vomiting, and stomach pain start after the first symptoms. A skin rash may develop. By the third or fourth day of illness some people with Ebola hemorrhagic fever may develop internal and external bleeding, shock and organ failure.

Ebola is spread through direct contact with blood or other body fluids (e.g., saliva, urine) of infected persons or objects that have been contaminated with infected body fluids. People who have close contact with a nonhuman primate infected with the virus are also at risk.

# Recommendations for U.S. Travelers

The World Health Organization (WHO) has reported that there is no need for any travel restrictions to Uganda. Generally, the risk of contracting Ebola virus is low for travelers. CDC recommends that anyone traveling to Uganda take the following steps to prevent Ebola virus infection:

- Avoid contact with Ebola patients and their body fluids.
- · Avoid touching used needles or other medical waste.
- Avoid contact with wild animals and bushmeat, including primates.

## More Information

For information about the current situation, see the WHO report at www.who.int.

For additional information on Ebola hemorrhagic fever, please see <a href="http://www.cdc.gov/ncidod/dyrd/spb/mnpages/dispages/ebola.htm">http://www.cdc.gov/ncidod/dyrd/spb/mnpages/dispages/ebola.htm</a>.

To learn more about traveling to areas with hemorrhagic fevers, see the <u>Viral Hemorrhagic Fevers</u> section of *CDC Health Information for International Travel 2008*.

Page Located on the Web at http://wwwn.cdc.gov/travel/contentEbolaUganda.aspx

# 別紙様式第2-1

# 医薬品 研究報告 調査報告書

機構処理欄			使用上の注意記載状況・ その他参考事項等 赤血球濃厚液-LR「日赤」 照射赤血球濃厚液-LR「日赤」	血液を介するウイルス、 細菌、原虫等の感染 vCJD等の伝播のリスク			
新医薬品等の区分談当なし	公表国	₩ Ш	傾向を示し、 ペイランス数 脳脊髄液 ムにより過去	の、感染性であった。PrP であった。PrP 後的な脳波 は群は、他群 断上問題で	102% 米25 ドの年のが JDの中心、 もり、臨床金		から、 散血時 ア国に一定 、 英国滞在 、 英国滞在 年6月1日より ほもりません 背報の収集に
新医薬品	子, 野崎一朗,	岩本樹ん,布Dサーベイツンゴン・インチのであった。	上がりた増加 EJ・CJDサー いて、画像、J S。このシステ	128例(14.0%)28例(0.2%)78列用未満)给9ヵ月未満)给26計算型的次26計算型的次26計算型的次26%(2.2%)26%(2.2%)28%(2.2%)28%(2.2%)28%(2.2%)	7.4%)、コトノ 次々のためな がなった。 になった。 自つは48% に 個のみでもん		約4年の目的 窓し、欧州36次 ででいる。また いる、平成17から、平成17からの献由 なからの献由 な知見及び僧
第一報入手日 2007. 10. 22	山田正仁,篠原もえ子,野崎一朗,	浜口毅, 中村好一, 北本哲之, 佐藤猛, 水澤英洋, CIDサーベイランス委員会, 2007年プリオン研究会	年以上に渡り右肩に関する調査研究到はかれる全患者についる	、遺伝性フリオン酒(よい)、および分類不能(無動性無言まで)(無動性無言まで)(後的脳液を欠く、場壁に属し、特に視床	32.3%)、ゴトノ200変異しJD26例(20.4%)、ゴトノ102変異23ほとんどないコドン180、232変異が多くみられるなどの特色が老が判明したものを合計すると129例になった。 dCJDの中で、典型例(プラーク型)の割合は剖検例では48%であり、臨床を住、vCJDは英国短期滞在歴がある1例のみである。	今後の対応	ト字社は、、CJDの血液を介する感染防止の目的から、 截血時 )海外渡航歴(旅行及び居住)を確認し、 欧州36ヶ国に一定 主したドナーを無期限に献血延期としている。 また、 英国滞在 FSvCJD患者が国内で発生したことから、 平成17年6月1日より 6年に1日以上の英国滞在歴のある方からの献血を制限して 後もCJD等プリオン病に関する新たな知見及び情報の収集に
報告日		研究報告の公表状況	〇わが国におけるヒトのプリオン病の実態:最近のサーベイランスデータ 我が国の人口動態統計では、クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)による死亡は過去20年以上に渡り右肩上がりに増加傾向を示し、 2005年は人口100万対1.23人であった。『プリオン病および遅発性ウイルス感染症に関する調査研究班』・CJDサーベイランス委 員会による現行のプリオン病調査は1999年から始まった。そこでは、プリオン病が疑われる全患者について、画像、脳脊髄液 マーカー、プリオン蛋白(PrP)遺伝子型、病理などの検査を含めた実地調査を行うことを原則としている。このシステムにより過去	8年間に918例がブリオン術と判定された。病型別では、処発性CJD/16例(78.0%)、遺伝性ブリオン病128例(14.0%)、感染性(獲得性)CJD72例(7.8%)[変異型CJD(vCJD)1例/硬膜移植後CJD(qCJD)71例]、および分類不能2例(0.2%)であった。PrP遺伝子に変異がないことを確認した孤発性CJD387例の臨床像をみると、進行が速く(無動性無言まで9ヵ月未満)特徴的な脳波所見を有する典型例は74%、それ以外の非典型例が26%を占めた。進行が遅く特徴的脳波を欠く、最も非典型的な群は、他群と較くて脳脊髄液マーカーやMRI上の高信号の陽性率も低く、Parchi分類でMM2型に属し、特に視床型が臨床診断上問題で、数ペイン脳脊髄液マーカーやMRI上の高信号の陽性率も低く、Parchi分類でMM2型に属し、特に視床型が臨床診断上問題で、	めった。遺体性ノリオンが1786別の方類では、ゴトブ180変異42別(32.3%)、ゴトブ20変異しD20別(20.4%)、ゴトブ102変異だ3例(19.6%)、エドブ232変異17例(13.3%)他の順であり、欧米ではほとんどないコドン180、232変異が多くみられるなどの特色があった。dCJDは1396年の佐藤班による全国調査以来、硬膜移植歴が判明したものを合計すると129例になった。dCJDの中で、おった。dCJDは1996年の佐藤班による全国調査以来、硬膜移植歴が判明したものを合計すると129例になった。dCJDの中で、比較的緩徐な進行を示し特徴的脳波を欠き脳にPrP斑を認める非典型例(プラーク型)の割合は剖検例では48%であり、臨床例を含めるとdCJD全体の約1/3を占めると考えられた。2007年7月現在、vCJDは英国短期滞在歴がある1例のみである。		日本赤十字社は、、CJDの血液を介する感染防止の目的から、 献血時に過去の海外渡航歴(旅行及び居住)を確認し、 欧州36ヶ国に一定期間滞在したドナーを無期限に献血延期としている。 また、 英国滞在歴を有する、CJD患者が国内で発生したことから、 平成17年6月1日より1980~96年に1日以上の英国滞在歴のある方からの献血を制限している。 今後もCJD等プリオン病に関する新たな知見及び情報の収集に努める。
	濃厚液	赤」(日本赤十字社) 日赤」(日本赤十字社	態:最近のサーベアエルト・ヤコブ病(アリオン病およいアリオン病およいの毎年から始まった。): 新理などの検査	1。 新型別では、東 2(vCJD)1例/顧 発性CJD387例の の非典型例が26。 高信号の陽性率は	1 C(1、1トノ180%) (4) 他の順であり、 (4) 全国調査以来、領 (4) 全脳にPrP斑洛 におえられた。 2007		左8年間に日本国 人口動態統計では 増加傾向を示し、 告である。
		赤血球濃厚液-LR「日赤」(日本赤十字社) 照射赤血球濃厚液-LR「日赤」(日本赤十字社)	〇わが国におけるヒトのプリオン病の実態:最近のサーベイランスデータ我が国の人口動態統計では、クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)による死2005年は人口100万対1.23人であった。『プリオン病および遅発性ウイル員会による現行のプリオン病調査は1999年から始まった。そこでは、プリマーカー、プリオン蛋白(PrP)遺伝子型、病理などの検査を含めた実地で一声。	リオン術と判定され、 1(7.8%)[変異型CJI いてとを確認した孤 例は74%、それ以外 マーカーやMRI上の	めった。遺伝性ノッダン物178例の方類では、コトノ180多異42例に例(19.6%)、コドン232変異17例(13.3%)他の順であり、欧米ではあった。 gCjDは1396年の佐藤班による全国調査以来、硬膜移植歴比較的緩徐な進行を示し特徴的脳波を欠き脳にPrP斑を認める非を含める5cGjD全体の約1/3を占めると考えられた。 2007年7月 現	報告企業の意見	CJDサーベイランス委員会による調査では過去8年間に日本国内で918例がプリオン病と判定された。また、人口動態統計ではCJDによる死亡者数は過去20年以上に亙って増加傾向を示し、2005年は人口100万対1.23人であったとの報告である。
識別番号 報告回数	一般的名称	販売名(企業名)	○わが国における 我が国の人口動態 2005年は人口100 員会による現行の マーカー、プリオン	8年間に918例がフ (獲得性) CJD72例 遺伝子に変異がな 頭伝子に変異がな 所見を有する典型 と較べて脳脊髄液	80/に、適位性/1 例(19.6%)、コドン あった。dCJD/は19 比較的緩徐な進行 を何めるとdCJD命	鞍	チーペイランス委員: 318例がプリオン病と こよる死亡者数は過 年は人口100万対1.
職別		殿	臣	究報告の概	閣		<u> </u>



MedDRA/J Ver.10.0J

わが国におけるヒトのプリオン病の実態:最近のサーベイランスデータ 山田正仁 <sup>1,6</sup>、篠原もえ子 <sup>1</sup>、野崎一朗 <sup>1</sup>、浜口 毅 <sup>1</sup>、中村好一 <sup>2,6</sup>、北本哲之 <sup>3,6</sup>、 佐藤 猛 <sup>4,6</sup>、水澤英洋 <sup>5,6</sup>、CJD サーベイランス委員会 <sup>6</sup>

「金沢大学大学院 脳老化・神経病態学(神経内科)、<sup>2</sup> 自治医大公衆衛生、<sup>3</sup> 東北大学大学院プリオン蛋白研究部門、<sup>4</sup> 東大和病院、<sup>5</sup> 東京医科歯科大学大学院脳神経病態学(神経内科)、<sup>6</sup> 厚生労働省・難治性疾患克服研究事業「プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究班」・CJD サーベイランス委員会

わが国の人口動態統計では、クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)による死亡 は過去 20 年以上に渡り右肩上がりに増加傾向を示し、2005 年は人口 100 万対 1.23 人であった。『プリオン病および遅発性ウイルス感染症に関する調査研究 班』・CJD サーベイランス委員会による現行のプリオン病調査は 1999 年から始 まった。そこでは、プリオン病が疑われる全患者について、画像、脳脊髄液マ ーカー、プリオン蛋白 (PrP) 遺伝子型、病理などの検査を含めた実地調査を行 うことを原則としている。このシステムにより過去8年間に918例がプリオン 病と判定された。病型別では、孤発性 CJD 716 例 (78.0%)、遺伝性プリオン病 128 例 (14.0%)、感染性(獲得性) CJD 72 例 (7.8%) [変異型 CJD (vCJD) 1 例 /硬膜移植後 CJD (dCJD) 71 例]、および分類不能 2 例 (0.2%) であった。PrP 遺伝子に変異がないことを確認した孤発性 CJD 387 例の臨床像をみると、進行 が速く(無動性無言まで9ヶ月未満)特徴的な脳波所見を有する典型例は74%、 それ以外の非典型例が26%を占めた。進行が遅く特徴的脳波を欠く、最も非典型 的な群は、他群と較べて脳脊髄液マーカーや MRI 上の高信号の陽性率も低く、 Parchi 分類で MM2 型に属し、特に視床型が臨床診断上問題であった (Hamaguchi et al. Neurology 64:643, 2005)。遺伝性プリオン病 128 例の分類では、コド ン 180 変異 42 例 (32.9%)、コドン 200 変異 CJD 26 例 (20.4%)、コドン 102 変 異 25 例 (19.6%)、コドン 232 変異 17 例 (13.3%) 他の順であり、欧米ではほと んどないコドン 180、232 変異が多くみられるなどの特色があった。dCJD は 1996 年の佐藤班による全国調査以来、硬膜移植歴が判明したものを合計すると 129 例になった。dCJD の中で、比較的緩徐な進行を示し特徴的脳波を欠き脳に PrP 斑を認める非典型例 (プラーク型) の割合は剖検例では 48%であり、臨床例を含 めると dCJD 全体の約 1/3 を占めると考えられた (Noguchi-Shinohara et al. Neurology 69:360, 2007)。2007 年 7 月現在、vCJD は英国短期滞在歴がある 1 例 (Yamada et al. Lancet 367:874, 2006) のみである。

別紙様式第 2—1

医薬品 研究報告 調査報告書

聯別來号·報牛回券		報告日	第一報入手日	新医薬品等の区分	総合機構処理欄	
- TK II II W			2007年12月17日	該当なし		
的各称別	別紙のとおり	研究報告の	י דיסטי מי מיסטים	公表国		
売名(企業名) 別	別紙のとおり	公表状况	Flos Fathogens. ZUU(;3:1895~1906			
問題点:2005年か	問題点:2005年から2006年にかけてのレユニオン諸	ニオン諸島でのチク、	島でのチクングニヤウイルス感染のアウトブレイクは、	トブレイクは、ヒトスジシマ	使用上の注意記載状況・	T
カをチクングニヤウ	カイルスのベクターとし、言	また致命的な感染が幸	カをチクングニヤウイルスのベクターとし、また致命的な感染が報告された流行であるという特徴を持っていた。	帝徴を持っていた。	その他参考事項等	_
以哲の流行では、チアウトブレイクした マカ)をプライクリた	-クングニヤウイルス(CHI : CHIKV 感染は、266,000 - 一ベクターとするが、200	IXV)感染は非致死! 人が発症し、260 人 5~2006 年のレユニ	以前の流行では、チクングニヤウイルス(CHIKV)感染は非致死性の感染症と考えられていた。しかし、レユニオン諸島でアウトブレイクした CHIKV 感染は、266,000 人が発症し、260 人の死者が出た。CHIKV は、Aedes aegypti(ネッタイツマカ)をプライマリーベクターとするが、2005~2006 年のレユニオン諸島でのアウトプレイクにおけるベクターは Aedes	以前の流行では、チクングニヤウイルス(CHIKV)感染は非致死性の感染症と考えられていた。しかし、レユニオン諸島でアウトブレイクした CHIKV 感染は、266,000 人が発症し、260 人の死者が出た。CHIKV は、Aedes aegypは(ネッタイシャカ)をプライマリーベクターとするが、2005~2006 年のレユニオン諸島でのアウトブレイクにおけるベクターは Aedes	記載なし	
<i>ilbopictus</i> (ヒトス 研究者らは、CHIK	<i>albopictus</i> (ヒトスジシマカ)であった。 研究者らは、CHIKN のエンベロープ蛋白(E1)	の 226 番目のアミノ	albopictus(ヒトスジシマカ)であった。 研究者らは、CHIKV のエンベローブ蛋白(E1)の 226 番目のアミノ酸がアラニンからバリンに変異していることを明らかに	異していることを明らかに	•	
った。この変異によ 首するようになり、	した。この変異により、CHIKVはネッタイシマカと比較して、ヒトスジシマカー 箱するようになり、また乳のみマウスへもより効率的に感染するようになった。	マカと比較して、ヒー効率的に感染するよ	トスジシャカへの感染性が増 ・になった。	した。この変異により、CHIKV はネッタイシマカと比較して、ヒトスジシマカへの感染性が増し、その唾液腺でより早く増殖するようになり、また乳のみマウスへもより効率的に感染するようになった。		
- つのアミノ酸電核アメガ流行を起いし				<b>5存在しない地域で変異ウイ</b> がときにどのように感染サ		
(クルを確立するか   やアメリカ大陸に	イクルを確立するかに関する重要な仮説となる。ヒトスジシ州やアメリカ大陸に拡がる可能性を増大させることとなる。	5。ヒトスジシマカに 5こととなる。	イクルを確立するかに関する重要な仮説となる。ヒトスジシマカは広く分布しているため、この変異は CHIKV の分布が欧州やアメリカ大陸に拡がる可能性を増大させることとなる。	)変異は CHIKV の分布が欧		
	報告企業の意見		4後	今後の対応	,	
別紙のとおり			今後とも関連情報の収集に 図っていきたい。	今後とも関連情報の収集に努め、本剤の安全性の確保を 図っていきたい。		
		,	. 7:			
			:			i

MedDRA10.1

一 一	挨	①人血清アルブミン、②人血清アルブミン、③人血清アルブミン*、④人免役グロブリン、⑤乾燥ペプシン処理人免疫グロブリン、⑥乾燥水パンン処理人免疫グロブリン、⑥乾燥水に大免疫グロブリン・⑥乾燥水に、⑥乾燥水に、⑥乾燥水・カンン、⑥乾燥水・カンン、⑥乾燥水・カンン、⑥乾燥水・カンン、⑥乾燥水・カン、⑥乾燥水・カン、⑥、中ロンビン、⑥、中ロンビン、⑥、カン・ガリン・がの乾燥水・1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、1、
販売名(企業名)	(名)	①献血アルブミン20"化血研"、②献血アルブミン25"化血研"、③人血清アルブミン"化血研"*、④"化血研"ガンマーグロブリン、⑤献血静注グロブリン"化血研"、⑥献血ベニロンー1、⑦ベニロン*、⑧注射用アナクトC2,500 単位、⑨コンファクトF、⑩ノバクト M、⑪テタノセーラ、⑩ヘパトセーラ、⑩トロンビン"化血研"、⑭ボルヒール、⑭アンスロビンP、⑪ヒスタグロビン、⑪アルブミン20%化血研*、⑭アルブミン 5%化血研*、⑪静注グロブリン*、⑩ノバクトF*、⑪アンスロビンP1500 注射用
報告企業の意見	. m2	チクングニヤウイルス (Chikungunya virus) は、トガウイルス科 (Togaviridae) のアルファウイルス属 (Alphavirus) に分類される 1 本鎖の RNA を核酸として持つ直径 70nm のエンベロープを有する球状粒子である。いままでに日本国内での感染・流行はないが、2006年 12 月に海外からの輸入症例 2 例が報告された。チクングニヤウイルスは蚊によって媒介されるが、感染後ウイルス血症を起こすことから、血液を介してウイルス感染する可能性を完全に否定できないため本報告を行った。   弊所の血漿分面製剤の製造工程には、冷エタノール分画工程、ウイルス除去膜ろ過工程あるいは加熱工程等の原理の異なるウイルス除去・不活化工程が存在しているので、仮にウイルスが原料血漿に混入していたとしても、ウイルスクリアランスが期待される。各製造工程のウイルス除去・不活化効果は、「血漿分面製剤のウイルスが原料血漿に混入していたとしても、ウイルスクリアランスが期待される。各製造工程のウイルス除去・不活化効果は、「血漿分面製剤のウイルスに対する安全性確保に関するガイドライン (医薬発第 1047 号、平成 11年8月 30 日)」に従い、ウシウイルス性下痢ウイルス (BVDV)、仮性狂犬病ウイルス (PRV)、ブタバルボウイルス (PRV)、オタバルボウイルス (PRV)、オタバルボウイルス (PRV)、オタバルボウイルス (PRV)、A型肝炎ウイルス (HAV) または脳心筋炎ウイルスはエンベロープの有無、核酸の種類等からモデルウイルスとしては BVDV が該当すると考えられるが、上記パリデーションの結果から、BVDV の除去・不活化効果を有することを確認している。また、これまでに弊所の血漿分面製剤によるチクングニヤウイルス感染の報告例は無い。   以上の点から、当該製剤はチクングニヤウイルスに対する安全性を確保していると考える。

\*現在製造を行っていない

# A Single Mutation in Chikungunya Virus Affects Vector Specificity and Epidemic Potential

Konstantin A. Tsetsarkin, Dana L. Vanlandingham, Charles E. McGee, Stephen Higgs

Department of Pathology, University of Texas Medical Branch, Galveston, Texas, United States of America

Chikungunya virus (CHIKV) is an emerging arbovirus associated with several recent large-scale epidemics. The 2005-2006 epidemic on Reunion island that resulted in approximately 266,000 human cases was associated with a strain of CHIKV with a mutation in the envelope protein gene (E1-A226V). To test the hypothesis that this mutation in the epidemic CHIKV (strain LR2006 OPY1) might influence fitness for different vector species, viral infectivity, dissemination, and transmission of CHIKV were compared in Aedes albopictus, the species implicated in the epidemic, and the recognized vector Ae. gegypti. Using viral infectious clones of the Reunion strain and a West African strain of CHIKV, into which either the E1–226 A or V mutation was engineered, we demonstrated that the E1-A226V mutation was directly responsible for a significant increase in CHIKV infectivity for Ae. albopictus, and led to more efficient viral dissemination into mosquito secondary organs and transmission to suckling mice. This mutation caused a marginal decrease in CHIKV Ae. aegypti midgut infectivity, had no effect on viral dissemination, and was associated with a slight increase in transmission by Ae. aegypti to suckling mice in competition experiments. The effect of the E1-A226V mutation on cholesterol dependence of CHIKV was also analyzed, revealing an association between cholesterol dependence and increased fitness of CHIKV in Ae. albopictus. Our observation that a single amino acid substitution can influence vector specificity provides a plausible explanation of how this mutant virus caused an epidemic in a region lacking the typical vector. This has important implications with respect to how viruses may establish a transmission cycle when introduced into a new area. Due to the widespread distribution of Ae. albopictus, this mutation increases the potential for CHIKV to permanently extend its range into Europe and the Americas.

Citation: Tsetsarkin KA, Vanlandingham DL, McGee CE, Higgs S (2007) A single mutation in Chikungunya virus affects vector specificity and epidemic potential. PLoS Pathog 3(12): e201. doi:10.1371/journal.ppat.0030201

### Introduction

The large-scale epidemic of the mosquito-transmitted alphavirus, Chikungunya virus (CHIKV), began in Kenya in 2004 and spread to several Indian Ocean islands including the Comoros, Mauritius, the Seychelles, Madagascar, Mayotte and Reunion. On Reunion island alone there were approximately 266,000 cases (34% of the total island population) [1-6]. In the continuing Indian epidemic there have been at least 1.4M cases reported [7-10] with continued expansion in Sri Lanka and Indonesia: CHIKV had not been reported to cause fatalities in prior outbreaks; however, during the outbreak on Reunion island, CHIKV was associated with at least 260 deaths [11,12]. The strain of CHIKV responsible for the Indian Ocean island epidemic has been well-characterized in cell culture and mosquito models [13-15]; however, the underlying genetic basis of the atypical phenotype of this CHIKV strain remains unknown.

CHIKV is transmitted by Aedes species mosquitoes, primarily Ae. aegypti. However, the 2005-2006 CHIKV epidemic on Reunion island was unusual because the vector responsible for transmission between humans was apparently the Asian tiger mosquito, Ae. albopictus [3,16]. This conclusion is based on several factors. This species is known to be susceptible to CHIKV infection and although infectious virus was not isolated from Ae. albopictus during the epidemic, CHIKV RNA was detected (X. de Lamballerie, personal communication). Furthermore, the species is anthropophylic, was abundant during the epidemic, and other potential vectors specifically Ae. aegypti were relatively scarce with a very limited distribution (P. Reiter, personal communication). Ae. albopic-

tus is abundant and widely distributed in urban areas of Europe and the United States of America [17-22]. CHIKV infections have been reported in many travelers returning to the US and Europe [12,23-26] causing concern that the virus could be introduced and become established in these areas [1,27,28]. In August and September of 2007, a CHIKV-Ac albopictus transmission cycle was reported for the first time in Europe, with an estimated 254 human cases occurring in Italy [29,30].

Alphaviruses are enveloped single stranded positive sense RNA viruses. Genomic RNA, of ~ 12,000 nt, encodes four non-structural (ns1-4) and three main structural proteins (capsid, E2 and E1). At neutral pH, E2 and E1 exist as heterodimers in which E2 forms spikes on the virion surface that interact with cellular receptors. The E1 protein lies below E2 and mediates fusion of the viral and cellular membranes during viral entry [31].

Analysis of CHIKV genome microevolution during the 2005-2006 Indian Ocean epidemic identified an alanine to valine mutation at position 226 in the El envelope glycoprotein (El-A226V) among viral isolates obtained during the

Editor: Edward C. Holmes, The Pennsylvania State University, United States of America

Received September 20, 2007; Accepted November 12, 2007; Published December 7, 2007

Copyright: © 2007 Tsetsarkin et al. This is an open-access article distributed under the terms of the Creative Commons Attribution License, which permits unrestricted use, distribution, and reproduction in any medium, provided the original author and source are credited.

\* To whom correspondence should be addressed. E-mail: sthiggs@utmb.edu

